

四 ネパールのむらと生活

東京女子大学 山本英治

最初にネパール研究の意義を述べておくことにしたい。社会に関する研究方法としてさまざまなアプローチがあるわけであるが、ここでは、世界史的発展のなかでの問題把握と比較研究の必要性を考えたい。すなわち、われわれが、日本の全体社会なり農村社会を研

究する場合、日本にのみ焦点を置き、それをインテンシブに分析することはもちろん必要であるが、これを人類の発展史のなかで位置づけ把握し展望することも、また必要だといわざるをえない。

國独資段階にある現代の日本社会には、資本主義の論理が貫徹している。したがって、日本社会の分析の基本には、こうした資本主義論が置かねばならないし、またこうした論理が支配する西欧諸国における研究成果から多く学ばなければならない。だが、日本社会には、資本主義の論理のみが存在するわけではなく、それとともに特殊日本的な論理が存在していることにも留意しなければならない。この特殊日本的なものをどうとらえるかについては、問題は多大あるが、私は、ここでは一応それを「アジア的特質」といわれるものにおいて考えてみたい。すなわち、「アジア的特質」という視点から特殊日本的なものを考え、それが日本の資本制化ないし「近代化」とどうかみあつてているのか、日本の資本制化、「近代化」が「アジア的特質」を止揚し、それと縁もゆかりもなくなったのか、あるいは、こうした「アジア的特質」が日本人の生活の実体、文化、意識、価値のなかに存在しつづけ、資本制化、「近代化」に影響を与えてづけているのか、ということである。

このようなことから、ここで当然に「アジア的特質」とは何か、ということが問題として提起されてくるわけである。これを明らかにするには、一方では歴史発展の論理が用意されなければならぬし、他方ではアジア諸国と日本との比較研究による実体的把握が要請されることになる。この場合、ネパールは、まだ資本主義的生産

様式に先行する段階から脱してはいず、資本制化、「近代化」に道遠いことから、ネパールにおいて「アジア的特質」の検討が可能でないかと考えたのである。また、現在のネパールは、報告のなかでふれるが、低生産力段階の農業を基盤としており、共同体の論理が支配的であるといえるが、それが「近代化」——資本主義的か社会主義的かは不明だが——のなかで解体し新しい社会構成体を形成していくことになるわけであるが、その共同体の解体過程と新しい社会構成体の形成過程の研究が、日本社会の分析にとって何らかの示唆を与えるのではないかと考えたのである。とくにこのなかで、共同体における人間存在とはどのようなものであるかを実体的に把握することも、新しい共同体の形成が云々される日本の現状を省みる時、意義のあることと思われる。

以上のような視点と問題意識をふまえて、ネパールにおける調査の中間報告を行ないたいと思つてゐるが、外國とくに发展途上国における國の調査であつただけに、またネパール語に未熟なため通訳を介しての調査であつただけに、さらには、ネパールの国情、政治、経済、社会構成、文化——とくに宗教——、生活、慣習についての認識も不充分であった故に、充分な成果が得られなかつたことをごとわつておきたい。それだけに、報告は、1.ネパールの概況、2.むらの運営と農民生活、について簡単にしか行なえないと、これを補うためにスライドを用いて説明し、少しでも実感的に理解して頂きたいと考えてゐる。